

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医保健看護学科

職階 教授

氏名 島津徳人

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

- 1) LSM(Azamoodle, 學理)を利用した出欠管理/レポート課題/小テストを実施した。
- 2) 人体解剖アプリやバーチャルスライドシステムを積極的に活用して教育 DX を推進した。
- 3) 社会で役立つ能力を伸ばす教育を提供することが教員の責任と捉えている。学生が自主性を持ち、興味・知的好奇心に沿って、積極的に「生命科学」の理解を深められるような授業を心掛けた。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
動物形態機能学Ⅰ(解剖学・組織学Ⅰ)	獣医保健看護学科	必修	1	90
動物形態機能学Ⅱ(解剖学・組織学Ⅱ)	獣医保健看護学科	必修	1	85
動物形態機能学Ⅲ(生理学Ⅰ)	獣医保健看護学科	必修	1	82
動物形態機能学Ⅳ(生理学Ⅱ)	獣医保健看護学科	必修	2	76
動物看護学概論	獣医保健看護学科	必修	1	81
動物病理学	獣医保健看護学科	必修	2	74
動物形態機能学・臨床検査学実習Ⅰ	獣医保健看護学科	必修	1	81
解剖学・同実習	臨床検査技術学科	必修	1	88
生理学実習	食品生命科学科	必修	1	60
病理学	食品生命科学科	必修	2	57

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

私の教育理念・目標は、人と動物の共生社会における“健康や食のバイオサイエンス”に貢献できるエキスパートの育成である。経済産業省からは、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、3つの能力（アクション、シンキング、チームワーク）からなる「社会人基礎力」が提唱されている。これに併せて、9割以上の企業が採用時に学生の社会人基礎力を重視している。これらの3つの能力が「社会人基礎力」として強調されるのは、今の大学生は、これらの力が弱い、あるいは欠けている者が少なからずいるからと理解できる。そのような中で、私の担当する初年次の専門科目教育から卒業論文履修に至る課程において、科学的根拠に基づいた客観的な情報の理解力、問題点を見出して主体的に解決する基礎学力と実践的能力を身に付けられる学生の育成に努めている。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

私の教育理念を実現するためには、学生が「ロジカル・シンキング」を身につけることだと考えている。中でも、授業中に私が意識しているのが、「なぜ」を追求させることである。「なぜ」を追求することにより、物事を論理的に考えることに繋がると考えている。これを踏まえて、私の教育法としては、①教科書は指定せずに自分に必要な情報の発見・収集力を養わせる、②授業内容をノートに記述（暗記）させるのではなく、頭の中で理解させ

る、③定期試験は記述式として主題内容は予め周知する、④実習においては、授業中に全員に声をかけ個人/集団の考えを問うことを重視している。このような授業法を行うなかで、学生に対しては、論理的な思考能力/文章の書き方/プレゼンテーションスキルを習得させ、能動的に学ぶ習慣や学ぶ楽しさを感じながら、しなやかな集団主義と個人主義を意識させている。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

獣医保健看護学科および食品生命科学科の実習では、バーチャルスライドシステム（バーチャル顕微鏡）を導入し、学生の疑問・質問を起点としたアクティブラーニング型授業を実践している。バーチャルスライド実習では、学習者が疑問を抱いた組織所見をモニター上に即時に提示できるため、教員は質問対象を正確に把握したうえで、的確に解説することが可能である。さらに、モニター上で複数の組織所見を同時に比較できることから、学習者の理解をより効果的に促進できる。実際の実習では、複数の学習者と教員が同一画面を囲み、所見を比較しながら討議する場面が多く見られ、双方向的な学びの活性化につながっている。

(2) ICTの教育活用

有

動物形態機能学・臨床検査学実習（1N）および生理学実習（1F）では、平成28年度教育改善プログラムに採択された「バーチャルスライド導入による組織・病理学実習のイノベーション」に基づき、組織標本の顕微鏡観察からバーチャルスライドシステムへの転換・更新を継続している。また、レポートおよび演習課題はすべてLMSで提示し、提出もデジタル化した。学生による授業評価においても、バーチャルスライドシステムは学習に有効であるとの評価が多数を占めている。

さらに、全講義科目において、毎回授業後にLMS上で練習問題（5択・解説付き）を公開している。学生が習得した知識をもとに設問へ取り組み、問題文の読解、方針決定、論理的な解答展開、結論導出という一連の思考過程を経験できるよう設計しており、問題内容も継続的に更新している。

加えて、獣医保健看護学科および臨床検査技術学科において、解剖学はその後の専門科目の基盤となる重要分野である。今年度は、HAB社「デジタルアトミーWeb（動物）」およびVisible Body社「ヒューマン・アトミーアトラス」を導入し、3D解剖モデルをARで観察できるアプリを活用した授業（レポート課題を含む）を実施した。これらの教材は、学内のみならず自宅からもアクセス可能であり、遠隔授業下における解剖学教育の質向上に有用であった。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

学生による授業評価アンケート（特に自由記述コメント）を真摯に受け止め、科目の特性および学生の評価・意見・理解度を踏まえて、授業方法の改善に継続的に取り組んでいる。複数学科の授業を担当しているため、学生一人ひとりの習熟度を把握しきれない場面もあり、対応に苦慮することがあるが、LMSの小テストや課題提出状況、授業内での質疑応答等を活用し、理解度の把握とフォローに努めている。また、本学FD講演会にも積極的に参加し、得られた知見を授業設計や運営に反映することで、より質の高い授業の実現を目指して授業改善を進めている。

(2) 学生の理解度の把握

A

授業内で問いを多く設定し、学生が自分の言葉で考えて答える機会を設けた。小テストでは毎回、正答率と誤答傾向を確認し、理解が不十分な項目は次回授業で再説明した。レポート課題は記述内容から理解度を評価し、共通課題はLMSで全体フィードバック、個別質問には随時対応して理解の定着を図った。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

A

学生間で学力差が大きく、学習志向にも違いがみられた。上位層は「練習量・意味理解・思考過程重視」が高く、下位層は「丸暗記・結果重視」に偏る傾向があった。そこで、自学自習支援を層別に設計し、下位層には授業復習に直結する練習問題を増やして、反復学習による基礎定着と達成感の獲得を図った。上位層には身近な題材を用いた課題を設定し、知識の適用、根拠に基づく説明、思考過程の言語化を重視し、学びの深化を促した。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

学生とのコミュニケーションでは、講義・自習の双方で質問や発言を積極的に促し、その内容を授業改善に反映している。特に、発言は「理解を示す行為」と同時に「授業づくりへの貢献」であることを繰り返し伝え、安心して意見を出せる雰囲気づくりに努めた。授業中に出た疑問はその場で扱うだけでなく、次回冒頭の振り返りや補足資料にも反映し、学生の声が授業に活かされる実感を持てるよう工夫している。

(5) 双方向授業への工夫

A

双方向授業では、学生と教員のコミュニケーションを軸に、学生の主体的・能動的な参加を引き出すことを重視している。特に実習科目では、授業冒頭に「問い」を提示し、議論のたたき台を明確化したうえで、学生と教員が課題意識を共有しながら解決策を検討する進め方を実践している。学生の発言や観察結果を随時取り上げ、必要に応じて説明や手順を調整することで、理解の深化と実践力の向上につなげている。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

該当なし

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

授業評価では自由コメント欄の内容を重視し、学生の要望や指摘を具体的に把握するよう努めている。必要に応じて、寄せられた意見の概要を授業内で共有し、どの点をどのように改善するかを説明したうえで運用に反映している。あわせて、自由コメントの記載を促進するため、授業評価実施時に「改善してほしい点」「理解しづらかった箇所」「良かった工夫」など、記載してほしい観点を具体的に示し、建設的なフィードバックが得られるよう工夫している。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

コメント欄への記載項目を具体的に示したことで、学生は何を書けばよいか明確になり、授業に対する評価・意見・要望の記述が増加した。あわせて、自由記述の意義を授業内で継続的に説明し、積極的な記入を呼びかけた結果、授業評価アンケート全体の回収率も改善した。今後も、寄せられたコメントを授業改善に反映し、その内容を学生へ可視化して共有することで、双方向的な授業改善の循環を維持していく。

(3) (2) を踏まえた次年度の取組

授業評価システムでは、期末実施型の性質上、学生の意見・要望をその場で授業改善に反映することが難しい。そこで今後は、各回授業の終了時に短時間で回答できるミニアンケートを実施し、理解度・進行速度・疑問点を毎回把握する運用を試行したい。得られた結果は次回授業冒頭で共有し、説明の補強や課題設定の調整に即時反映することで、授業改善の即時性と学生参加型の学習環境の向上を図る。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

学生には、単なる板書の写しではなく「授業を再現できるノート」作成を提案する。具体的には、学習目標、要点、根拠、図表、演習過程、疑問点、振り返りを一体化して記録させ、復習時に自力で思考過程を再現できる構成を促す。あわせてタブレットPC活用では、①教材提示、②個別・反復学習、③情報収集、④観察・記録、⑤思考学習、⑥表現・制作、⑦プレゼン、⑧協働作業の各場面に適したアプリを選定・試用し、授業ごとの効果検証結果を学科内で共有する運用体制の構築を目指す。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

授業の遅刻・欠席者の減少

3年次病理学は月曜1限という時間帯の特性上、従来は遅刻・欠席が多い傾向にあったが、授業運営の工夫により改善がみられた。

授業評価アンケート自由記述の維持

学生による授業評価アンケートでは、自由記述欄のコメント数を継続的に確保し、授業改善に資する意見収集の水準を維持できた。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

大学主催のFD活動に積極的に参加し、より良い授業展開に役立てた。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

本学部の自習室は十分に確保されているが、ラーニングcommonsは設置されていない。可能であればラーニングcommonsの活用を目指し、学生同士が授業時間外に検討・議論し、資料収集やデータ解析などを行う授業機会を増やす。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年4月

TP リフレクションシート、シラバス、小テスト、レポート課題、授業教材、FD プログラムの参加記録、授業評価データ、授業に関するコメント（授業評価の自由記述やメールのやりとり等）